

中国の大学日本語教師による授業改善の試み¹

—ある教師研修会の成果物に基づく分析—

朱 桂 栄*

1. 研究の背景

2018年に中国の教育部より《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》(『大学の学部専攻教育の質に関する国家基準(筆者訳)』)が発表された(以下『国家基準』と略する)。この国家基準は学部の専攻教育の質に関する初めての国家基準であり、大学の専攻として必要な条件・整備・評価に関する要求を記している。そして、2019年に教育部が学部教育改革を深め、人材育成の質を全面的に高めることに関する意見を発表した²。さらに、2020年には《普通高等学校本科外国语言文学类专业教学指南》(『大学の外国語専攻における教育の手引き』(筆者訳))が発表された(以下、『教育の手引き』と略する)。こうした一連の国家主導の施策により、大学における日本語専攻の学生育成に関して、素養・知識・能力に関する明確な要求が提出された。

上述したように、教育の質が求められている中で、授業改革も求められるようになった。むしろ、授業の質の決め手は教師である。このような認識と関連し、教師研修を通して日本語教師の授業改善の意識を高め、授業改革を促す必要性がますます認識されるようになった。本研究は2018年に開催されたある全国的な日本語教師研修会を取り上げ、そこで実施された「素養・知識・能力を共に重視する授業デザイン」のワークショップの成果物を通して、中国の日本語教師の専門性向上にお

ける教師研修の意義を探る。

2. 先行研究

2.1 素養・知識・能力を共に重視する人材育成

中国では1999年より、大学の募集規模の拡大という政策が講じられた。その政策によって大学の数と学習者の数が急増した。2010年の《国家中长期教育改革和发展规划纲要(2010-2020年)》(『国家中长期教育改革と発展の計画要綱』(筆者訳))の公表をきっかけに、中国の大学教育は量的発展から質的向上へと転向した。さらに、2012年に大学の創造能力と革新能力の向上に関する意見と実施方案などの公表により、学部教育の質的向上が要求されるようになった。この動きが『国家基準』の作成の背景の一つであると言われている。また、これまでの大学教育の教育理念、学部教育の地位、授業方法、人材養成、教師などの面における問題点ももう一つの背景として挙げられる(許 2020)。

一方、中国の大学における日本語教育に関して、日本語専攻の数が2005年から2013年までに293か所から506か所に増加した(鐘 2015)。専攻の同質化と関連し、日本語教育の質の問題が浮かび上がった(許 2020)。そのため、『国家基準』と『教育の手引き』は、大学の日本語専攻の人材育成に準ずる基準として作成の時点から注目されていた(趙冬茜・修剛 2022)。『国家基準』では、外国語専攻の人材について、素養、知識、能力の面から具体的な要求を列挙している。以下、日本語専攻の『教育の手引き』を参照し、素養、知識、能力

*北京外国語大学北京日本学研究中心・准教授

に関する具体的な内容を示す。

素質面に関して、正しい世界観、人生観と価値観、好ましい道徳感と社会責任感、中国への深い感情と国際的な視野、人文と科学の素養及び協働精神、職人気質、革新精神を備えた人材の育成を目標とする。知識面に関して、日本語言語文化知識、日本の国情に関する知識、中国言語文化知識、関連分野の知識、人文社会科学と自然科学の基礎知識を有し、学際的な知識構造を形成する。能力面に関して、日本語運用能力、翻訳能力、文学鑑賞能力、異文化コミュニケーション能力、批判的思考力、研究能力、創発能力、情報技術応用能力（ICT能力）、自律学習能力、実践能力を持つ人材を育成する。

実際、『教育の手引き』の中には日本語専攻の人材育成だけでなく、カリキュラム、教材、授業方法、教師に関する要求も記されている。例えば、授業方法に関しては、理念を更新し、多様な授業方法が提唱されている。また、日本語教育は、現代科学技術を生かし、人材養成の理念、内容、モデルと方法の改革を促すことも要求されている。このように、『国家基準』と『教育の手引き』は教育改革を牽引する大きな存在となっている。

2.2 中国の日本語教師研修

中国の日本語教師研修をふり返ると、2000年までの教師研修の目的は教師の日本語力のレベルアップと、日本語、日本文学、日本文化などの日本学研究分野の理論知識と最新成果に関する情報の獲得であり、研修の形は専門家による講座形式であった（曹 2013）。2000年以降、日本語教育に関する教師研修が増えたが、依然として講座形式が多かった。2009年以降、日本語教師の授業実践に焦点を当てたワークショップ式の教師研修が見られるようになった（朱 2021）。

中国で特に影響力のある日本語教師研修は「中国日語教学研究会」（中国日本語教育研究会、筆者訳）が主催した「全国高校日語教師專業發展論

壇暨日語教師專業發展研修会」（全国大学日本語教師専門性發展パネル及び日本語教師専門性發展研修会、筆者訳。以下、大学日本語教師研修会と略する）で、2013年から毎年1回行われている。中国の日本語教師研修の中で初めて「教師専門性發展」という理念を掲げた研修会である（冷 2019）。

2.3 日本語教師の専門性發展に関する研究

冷（2019）は、中国国内の日本語教師研究をレビューし、中国国内の日本語教師發展に関する研究は、国内の英語教師發展に関する研究と比べ、遅れていると指摘している。楊秀娥（2021）は中国の日本語教師研究は体系化されておらず、研究主題を増やし、研究方法を強化する必要があると指摘している。

2018年に学部教育に関する『国家基準』が發布された後、授業改革、教師の専門性が注目されるようになった。楊峻（2021）はアンケートを通して大学日本語教師のピリーフを調べた。その結果、文法説明を重視する教師中心の考え方と、コミュニケーションを重視し学習者の自律学習を支持する考え方が同時に存在していると示された。

朱（2021）は2018年に安徽省で行われた「大学日本語教師研修会」を対象として、100名の日本語教師の内省シートを分析した。その結果、大学の日本語教師は、授業実施、授業効果、教師ピリーフ、教師知識、授業設計、授業評価などの面に多くの問題があることが分かった。そして、原因について、教師自身が「51%が教師に由来し、24.5%が学生に由来し、24.5%が客観的要因に由来する」と考えていることが分かった。この結果を踏まえ、朱（2021）は今後の教師の専門性發展のためには、教師ピリーフの転換、知識の更新と能力の向上が課題であると指摘している。

さらに、上記の「大学日本語教師研修会」を対象に、朱（投稿中）は、ケーススタディという手法を使い、4名の日本語教師のインターアクション

ンとグループ内省を分析した。その結果、グループの相互作用の中で教師たちが数多くの教育の事例、情報、リソースを分かち合ったこと、多様な視点から物事を考えたこと、問題解決の知恵が生まれたことなどが示された。

一方、上記のワークショップで「素養・知識・能力を共に重視する」授業デザインが目指されているが、それを実現できたのだろうか。本研究は引き続き追及したい。

3. 研究概要

3.1 研究目的

本研究はある中国大学日本語教師研修会の成果物に基づき、日本語授業の問題点と解決案を示した上で「素養・知識・能力を共に重視する授業デザイン」の実現性を探る。また、中国の日本語教師の専門性向上における教師研修会の意義も探る。

3.2 研究対象

本研究は、2018年に「中国日語教学研究会」によって中国安徽省で行われた大学日本語教師研修会を対象とする。研修会の初日には、講演や日本語教師による授業の実施方法に関する紹介があった。2日目は「素養・知識・能力を共に重視する授業デザイン」をテーマとするワークショップが行われた。全国50大学から100名の日本語教師がワークショップに参加した。ワークショップは「基礎日本語」「日本語読解」「日本語会話」「日本語聴解」「日本語作文」という授業に従って、5つのクラスに分けた。各クラスをさらに4-5人からなる複数のグループに分割し、全部で22のグループを作った。各クラスに、研修指導専門家が1-2名入り、グループ活動を観察したり、教師たちの要望に応じて適宜検討を行ったりした。

ワークショップは次の手順で行われた。まず、教師個人によるふり返しを行い、自分の教育実践の問題点を探り、その原因を考えて内省シート①

に記入する。それから、グループに入り、内省シート①に基づいて自分の内省を報告し合い、報告内容を巡ってやりとりをする。そして、グループ報告を踏まえ、グループメンバーが授業デザインにおける共通の問題点を探し、解決案を考えて内省シート②に記入する。さらに、グループ討論を踏まえ、グループメンバーが授業デザインを考えてポスターを作成する。なお、教師に参考用の「型」を提供した。その「型」は、報告の題目、存在する問題点、授業デザインという3つの部分からなる。授業デザインには、授業名、対象（学年、人数）、学習目標、タスク（内容と方法）、評価方式、その他が含まれる。各グループは「型」に従って授業デザインを考えるが、完成された後、各クラスで発表し、代表例を選ぶ。各クラスの代表例は大会で3分間報告し、ほかのクラスやグループのポスターが大会の会場で展示されるように設計された。

3.3 研究課題と研究方法

本研究では、朱（2021）、朱（投稿中）のシリーズ研究として、このワークショップの成果に注目し、「素養・知識・能力を共に重視する授業デザイン」の実現性について検討する。それを踏まえて、教師の専門性向上における教師研修の意義を探る。

この研修会では5つの代表例が選ばれた。本研究では代表例の中から、「基礎日本語」という授業の代表例を選んで事例研究をする。理由は、「基礎日本語」が大学の専攻としての日本語教育における最も重要な主幹科目であるからである。

分析データは、当該グループの内省シート②と授業デザインを記すポスターである。補助データとして、当該グループの代表者が大会で行った授業デザインに関する3分間報告の録音とその文字化資料である。

本研究は、分析資料の内容に根付いて授業デザインの特徴を分析する。そして、複数の資料を開

連づけ、ワークショップの成果を示し、日本語教師の専門性向上における教師研修の意味を見出す。

4. 研究結果

本研究は「基礎日本語」という授業のデザインを取り上げる。このグループの内省シート②は、表1に示す。

表1 「基礎日本語」という授業の問題点と解決案

共通の問題点：「素養・知識・能力を共に重視する」考えがとても足りなかった。
原因分析：①教師による知識の解説が多かった。②能力面では言語の使用だけを強調し、思考力や研究能力への重視が足りなかった。③自律学習に関してあまり要求しなかった。
解決案：①学生の参加度を高める。例えば、授業前は予習させる。授業中、教師がチェックする時または解説する時、学生の積極性を引き出す。授業後はまとめと復習を要求する。②能力に関して、運用能力を強調すると同時に、思考力も重視する。自律学習に関して、具体的な指導をする。思考力と研究能力について、1、2年生の場合、思考力を重視する。3、4年生の場合、研究能力の向上を要求する。例えば、学びながら考えてもらう、学生同士のディスカッションと分析を増やす、協働学習を取り入れる、小論文を書かせる、教材と関連のある内容を収集し、感想を書かせる。③学生の興味を引き出す。

表1に示すように、授業実践におけるこのグループの共通問題は、これまでの授業デザインにおいて「素養・知識・能力を共に重視する」ことを考慮しなかったことが記されている。原因分析にあるように、教師の意識の在り方が主な原因だと分かる。解決案として、学生の参加度を促進するために、授業前、授業中、授業後に分けて対策が講じられた。また、能力育成について、思考力と自律学習能力に焦点を当てて具体的な解決案が講じられた。このようなグループ内省を通して、グループは次のような授業デザインを考案した。

表2 「基礎日本語」という授業のデザイン

【題目】「素養・知識・能力の三位一体の授業方式の改革の試み——『総合日語』第2冊第27課の文法を例にして」
【対象者】 大学2年生（上半期）1クラス30人
【学習目標】 ①命令・禁止の用法を理解する、②悩みのある人に対し、励ましたり、アドバイスを出したりすることができる
【タスク】 内容：「Vなさい」、「動詞の命令形」、「～るといい」
方法： 授業前：①学生がグループに分けてタスクをもらう、②学生が文法理解に必要な例文を集める。③学生がパワーポイントを作る。
授業中：④教師が導入した後、学生がグループに分けて発表する、⑤教師がコメントした後、文法理解における要点をまとめる、⑥学生が応用練習をする、教師がチェックする、⑦教師が宿題を出す。
授業後：小テスト、学生個人の内省シート、学生同士の相互評価
【評価方法】 学生の発表用パワーポイント、小テスト、学生個人の内省シート、学生同士の相互評価

表2のように、タイトルから、この「基礎日本語」の授業デザインの狙いは「素養・知識・能力を共に重視する」ことが分かる。対象授業は「基礎日本語」である。中国の日本語学科の最も重要な主幹課程として、「基礎日本語」の授業で日本語の言語知識を学ぶことが不可欠とされているが、教師による一方的な文法説明に終始することも少なくない。結局、日本語授業に「学生が積極的ではない」「教師による言語知識の解説が多すぎる」「授業方法が単一でまたは不適切である。新しい方法を使っても成功できない」といった問題点がある（朱 2021）。このデザインには、「型」に示す問題点を書かなかったが、当該グループの表1に示す内省シート②から、授業実践の中の問題点を窺うことができる。

この授業の対象は大学2年生である。90分の授業における学習目標は、文法知識だけでなく、学んだ知識を使って悩む人を励ましたり、アドバイスを出したりするCan do方式の目標である。授業方式について、表1の内省シート②に書かれた解決案が生かされ、授業前の予習が取り入れられ

ていることが分かる。近年、中国の教育界では、反転授業を重視する動きがある。そして、このワークショップの前日に現場教師による授業の進め方の紹介があり、そこで紹介された「基礎日本語」の授業にも授業前の予習があった。そのアイデアが生かされたのか、このグループは授業前に予習を取り入れ、授業中、学生が事前に調べたことをグループで発表するというふうに設計した。その目的は学生の参加度を促進することにあるというのが、内省シート②からも窺える。

そして、この授業デザインに見られる教師の役割が多様化し、知識の伝達者からコメント役、まとめ役、応用練習のチェック役などに変わり、学生の学びを支える存在となっていることが分かる。「学びの権利が解放されるのが学習の内的なニーズであり、どの学生にも自己決定権がある」（顔・羅 2014: 8）というように、この授業デザインに表れる教師と学生との関係は、学生を主体とすることを意味している。

そして、この授業デザインは評価を重視している。朱（2021）では、100人の日本語教師の個人内省を分析したところ、「授業実施（41.1%）、授業効果（19.3%）、教師ビリーフ（14%）、教師知識（10.6%）、授業デザイン（9.7%）と比べ、授業評価（5.3%）に関するふり返りの数が最も少ない。これは一部の日本語教師が授業における評価の重要性をまだ十分に意識していないことに関係するかもしれない」と指摘している。この状況を踏まえて考えれば、表2に示す授業デザインでは、多様な評価方法を取って学習を促進しようとするのが窺える。これは、近年提唱されている学びの結果だけでなく学びのプロセスをも重視する評価観とも一致していると言える。

さらに、このグループの報告者は大会で3分間報告を通してこの授業デザインを考案した時の意図をこのように述べた。「10分間かけて視覚的材料を使って授業を導入し、学生の興味関心を引き出す。後の35分間は、単語や文法やテキストを学

ぶ。これは伝統的な授業内容であるが、教師が説明するのではなく、学生の報告と教師のコメントを融合する形を取り、学生の参加度を高める。もう一つの45分は、10分間かけて、テキストと関連する文化内容を導入し、学生の興味関心を高める。その後、ペア学習やグループ学習で言語運用の実践活動を展開する。具体的には、ディスカッションやロールプレイなどの形を取ることができる。このように、20分かけて授業で学んだ内容を定着させる。最後の15分間は、スピーチや自由発表の時間とする。通常これらは授業の最初に行うが、わたしたちは授業の最後をしたい。目的はこの授業で習った言語知識を活用し自分の考えを表出することを促すためである」と報告された。最後に、報告者は「素養・知識・能力」についての認識を語った。「知識とは単語と文法の理解と記憶を意味し、能力とは知識への具体的な運用を意味し、素養とは文化知識、文学知識と日本社会の関連知識などが学びの中に融合することを意味すると理解している。素養・知識・能力を合わせて育成することにより、学生の授業への参加度を高めることができる」と述べられている。

全体的に見れば、当該グループの授業デザインはまだ発想程度であるが、報告者の報告によってより具体的になった。報告者は1回45分、合計2回分の授業デザインの中でいずれも学生の興味関心に言及した。これは学生のニーズへの重視を意味している。また、授業形式も豊かになり、グループ報告や、ディスカッション、ロールプレイなど学生を主体とする活動が多く示されている。授業を展開する時のポイントも文法説明から言語運用へと転換し、普段授業の一番最初に行われるスピーチや自由発表を授業後に変えるなど、意識的に授業方式を変えた。これは学生にパフォーマンスを披露する場を提供しただけでなく、教師に授業効果を観察する視点を増やすことになる。教師たちの置かれた実際の状況から考えてみれば、授業構成、教師の役割、学生の主体性、評価への重

視、能力観の変化など多くの点において教師の意識の変化が見られたと言える。

このグループの報告者が最後に「みんなで一緒に授業案を考えるのが初めての体験だ。とても楽しかった」と言った。この発言から、教師たちは協働学習を認めていることも窺える。趙（2009：12）が指摘したように、教育実践が複雑で不確定な要素が多く含まれているので、理論を直接、具体的な問題解決に応用できない場合が多い。そのため、教師たちは仲間と一緒に教育現場の問題に向き合っ、原因を分析し、解決案を考えて、授業案のデザインをするといった経験は、教師の学びに大きな意味があり、教師の意識の変化と能力の向上に積極的な影響を与えられらる。

5. 終わり

本研究は日本語教師研修会の成果物を対象に、事例分析を通して、「素養・知識・能力を共に重視する授業デザイン」の可能性を分析した。その結果、教師が授業デザインを考える際に、「素養・知識・能力を共に重視する」意識が現れ、学習者主体の教育理念に従って授業デザインをしていることが分かる。

教育改革の難しいところは、教師の意識改革である。この研修会では、教師たちは協働学習に参加し、実体験を通して協働の意義を感じ取ったと思われる。そして、「素養・知識・能力を共に重視する」という目標を目指し、協働を通して、授業デザインが考案された。グループ活動の中で、教師たちはお互いに刺激し合い、解放的に物事を考え、従来の発想から脱皮し、新しい視点から問題を分析し解決することができた。その結果、新しい授業デザインを試みることができた。教師たちは授業デザインの展示を通して、他の教師や専門家とやりとりし、新しい授業デザインをふり返る機会を得ることができた。これが教師の意識の転換と能力の向上に大きな意味があると考えられる。

本研究は22のグループの中から1例だけを挙げたに過ぎない。今後ほかのグループの授業改革への思いにも耳を傾けたい。また、教師研修の場だけでなく、教師の授業実践の現場を観察し、授業デザイン案を実施していく中での問題解決を追究したい。

注

- 1 本研究は国家社会科学基金プロジェクト“（中国語名）中国高校日本語教師專業發展路徑探索与模式构建研究”（17BYYY194）の一部である。研究代表者：冷麗敏
- 2 教育部关于深化本科教育教学改革全面提高人才培养质量的意见 - 中华人民共和国教育部政府门户网站（moe.gov.cn）

参考文献

- 许宗华.《普通高等学校本科日语专业教学指南》解读[J]. 外语学刊, 2020(5).
- 钟美荪.《实施本科教学质量国家标准, 推进外语类专业教学改革与发展》[J]. 外语界, 2015(2).
- 赵冬茜, 修刚. 三位一体的高校日语专业人才培养路径—外语类专业《教学质量国家标准》《日语教学指南》《日语教学大纲》的制定[J]. 西安外国语大学学报, 2022(1).
- 曹大峰.「中国における大学日本語教師研修の歩みと課題」『日本学研究』23、2013.
- 朱桂榮. 高校日语教师专业发展现状研究——基于反思型工作坊的质性分析 [J]. 日语学习与研究, 2021(4): 107.
- 冷麗敏. 高校日语教师专业发展与的现状与课题, 《日语学习与研究》, 2019(5): 52.
- 杨秀娥. 日本的日语教师专业发展研究动态——以《日本语教育》杂志为考察对象, 《日语学习与研究》, 2021(4): 115.
- 杨峻. 高校日语教师专业发展现状研究——教师信念特征分析[J]. 日语学习与研究, 2021(3): 80.
- 朱桂榮. 高校日语教师工作坊互动反思的个案分析(投稿中)
- 顏奕, 罗少茜. 高校外语教师反思性语言教学研究——一项关键事件问卷调查[J]. 中国外语, 2014(2): 8.
- 赵明仁. 教学反思与教师专业发展——新课程改革中的案例研究[M]. 北京师范大学出版社 2009. 130
- 冷麗敏. 高校日语教师专业发展路径探索与模式构建[J]. 日语学习与研究, 2021(3).